+博論書式４（論博書式４）

平成 27 年 1 月 9 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	言語聴覚分野
学籍番号	12S3037	院生氏名	相馬 有里

通学キャンパス	東京青山キャンパス
論　文　題　目	失語症者の談話における意味伝達能力の検討 －失語症者と健常高齢者の比較から
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格

＜審査結果の要旨＞

1. 研究の概要

1) 目的：本研究は，失語症者における意味伝達能力の特徴を明らかにすることを目的とした研究である．

2) 研究デザイン：研究Ⅰと研究Ⅱから成る．

3) 研究Ⅰ：失語症者の談話における意味伝達能力についての検討

①目的：失語症者の談話における意味伝達能力について，保たれている能力と，障害されている能力を明らかにする．

②方法：対象は，失語症患者 18 名（平均 62.1 歳）と健常者 18 名（平均 63.8 歳）．談話課題は昔話を用い，物語の主要な部分を表す 9 枚の絵カードの配列を実施後，自由な発話を求めた．

③結果・考察：失語症者において，物語に関連のあることを言う能力，物語の筋を順序立て言う能力が保たれることが明らかになった．失語症タイプ別の分析では，Wernicke 失語は周辺的な発話数が多く，必要以上の情報まで発話する傾向があることが示された．

4) 研究Ⅱ：健常高齢者の談話における意味伝達能力についての検討

①目的：健常高齢者の談話における意味伝達能力の特徴を検討し，加齢による影響を明らかにする．

②方法：対象は，健常高齢者 18 名（平均 71.1 歳）と健常若年者 18 名（平均 22.9 歳）．課題，手続きは研究Ⅰと同様である．

③結果・考察：高齢者の談話は結束辞が少なく，周辺的な発話が多く，必要以上の情報を与え，情報のつながりが弱いという特徴が示された．

5) 結論：失語症者は，言語形式の処理能力は低下しているが，物語に関連のあることを言う能力，物語の筋を順序立て言う能力は保たれている．Wernicke 失語と高齢者の発話は，必要以上の情報を与えるという点で類似した特徴を有する．高齢の Wernicke 失語においてこの傾向が強まるか否かについては，今後の検討課題である．

2. 研究方法，論証，論文形式

研究方法は，倫理的に問題ない．論理性，形式とも適切である．

3. 知見の新規性と価値

本研究の新規性は，失語症者の談話能力を意味伝達の観点から分析したことにある．このような検討はこれまでなされていないことから，失語症臨床に貢献する研究として高く評価できる．

4. 審査経過・口頭試問

審査会は 2 回開催し，初回審査で論文審査と口頭発表を実施し，論文修正を求めたところ適切に修正された．口頭試問においては適切な応答がなされた．

5. 合否

以上の結果から，審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（保健医療学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた．

論文審査担当者	主　査　　阿部　晶子 副　査　　鹿島　晴雄 副　査　　城間　将江